

特定非営利活動法人 子ども自立の郷

ウォームアップスクールここから

プロジェクト 報告書

余呉の地域と不登校生の心を結ぶ

夏祭りの企画と触れ合いの場づくり

京都文教大学 3回生 稲葉諒二

龍谷大学 1回生 角田朋生

11月19日

目次

1. 概要	1
2. 夏祭り	1
3. BBQ サイト製作	6
4. 活動成果	8
5. 課題・学び	9

1、概要

今回、私たちは滋賀県長浜市余呉町上丹生にある特定非営利活動法人子ども自立の郷ウォームアップスクールここから（以下ここから）で実習を行った。本実習では、「夏祭りの企画・運営」、「BBQ サイト製作」の二つのミッションが与えられた。インターンシップ生（以下インターン生）の実習期間は8月20日～8月24日、8月27日～8月31日、9月3日～9月7日、9月10日～9月14日の計20日間であり、実習期間中は子どもや先生と共にここでここからで寄宿を行った。前半の10日間で「夏祭りの運営・企画」、後半の10日間で「触れ合いの場作り」を主に行つた。各ミッション（夏祭り、BBQ サイト製作）における活動内容、活動成果、課題・学びの順で説明を行う。

2、夏祭り

夏祭りの概要・反省

ここからとインターン生が企画・運営する余呉の夏祭りは今年で4年目となる。そのた

め、祭りの第一のテーマはこれまでの過去とのつながり、そしてこれから未来とのつながりといった、「時間的なつながり」とここから・地域・インター生が協力して祭りを作る「横のつながり」との二つの「つながり」を持った祭りにすること。第二のテーマは感謝の気持ちを伝えるといった目的で祭りの企画・運営を行った。今回の祭りのテーマは「ここから伝わる余呉の心—ありがとう+1プロジェクトー」で決定した。

夏祭りは地域の方にも広く認知されるようになり規模も大きくなってきた。昨年までは「夜の部」のみであり、子どもやお年寄りの方が祭りに参加できない場合があったため、今年からは、それらの方を対象とした「昼の部」も実施することになった。祭り当日の悪天候により、昼の部では参加者は少なかったが、夜の部では多くの方に来ていただき、多くの方に満足していただけた祭りを実施することができた。無事祭りを実施することができたのは、4年間実施してきた「つながり」のなかでの反省を活かし、事前に準備を行っていたからである。

祭りの準備期間ではここからの子ども・地域の方との交流の場面が多くあった。子どもとの交流では、共同生活のなかで子どもの特徴を感じられた。木材や工具の扱い・屋台の準備・灯籠の絵付けなど、といった祭りの準備だからこそ見られた子どもの新たな特徴を見つけることもあった。地域の方には、祭りの準備期間や祭り当日のボランティアといった様々な場面で協力していただいた。その中で地域の方のここからに対する強い思いが伝わってきて、ここからとのつながりがとても強いことを感じた。地域の方の協力があったからこそ、祭りの成功があり、またここからが地域の協力があるからこそ、様々な活動を行うことができるのだと感じることができた。

活動内容

祭りにおける準備期間・当日・後片付けまでのタイムスケジュールを次ページに示す

	+1 プロジェクト	影絵	灯籠	射的・紙飛行機	看板	設営
8/20						
8/21						
8/22	↓					
8/23		↓				
8/24			↓		↓	
8/27		↓		↓		
8/28				↓		
8/29		↓				↓
8/30						
				祭り当日		
8/31						後片付け

※1 「ありがとう+1 プロジェクト」(後述する) は「+1 プロジェクト」と示した。

- 祭り期間中における活動内容の詳細（祭り関係外も記載する）

8月 20 日（木）

祭りの概要の確認／祭りの台本の練り直し／灯籠製作

8月 21 日（金）

灯籠製作／製作する灯籠の数の目安を立てる（グランドに灯籠を設置した）／影絵のスクリーン・人形製作／影絵・灯籠のチェック／影絵・灯籠の調整

8月 22 日（土）

カフェの準備／灯籠製作／影絵のスクリーン・人形製作／ひまわり BBQ（※2）／+1 プロジェクトについての話し合い／看板の原案の作成

8月 23 日（日）

影絵の人形製作／灯籠製作／影絵の内容を子どもに伝える／看板製作／灯籠の製作／祭り・影絵の話し合い

8月 24 日（月）

掃除／灯籠の絵付け／看板・募金箱の製作

8月 27 日（木）

國友先生（ここからの指導員の先生）との予定の確認／影絵のスクリーン・人形の改良／申先生（コーディネーターの先生）への活動報告・意見交換／テントの設営／影絵の練習／町内放送の原稿製作

8月 28 日（金）

会場の設営（校舎内の整理、テント設置、ステージ製作、配線の確認、配線マップの作成）／祭りの備品の買い出し／社会福祉協議会（以下、社協）に機材のレンタル／射的・紙飛行機飛ばしの準備／機材のチェック／唐子先生・國友先生・インターン生での話し合い

8月 29 日（土）

会場の設営（机・椅子の搬入、レクレーション会場の準備、昇降口の改善）／影絵の練習／配線の最終チェック

8月 30 日（日） 祭り当日

8月 31 日（月） 祭りの後片付け（レンタルした物の返却、教室の整理 etc）

祭りにおける準備の詳細

- ありがとう+1 プロジェクト

概要

普段の生活のなかで感謝の気持ちを伝える「ありがとう」という言葉は伝えにくい事である。そのため、祭りという機会を通して「ありがとう」の気持ちを伝える企画。「ありがと

う」という言葉に、もう一言プラスして伝えることで感謝の気持ちをより深いものにする

詳細

インターン生が背中に「ありがとう」の文字を入れた白ハッピを着用し、祭り当日の夜の部に祭りに来ていただいた方に、自分の感謝の気持ちと更に一言プラスした言葉（以下ありがとう+1）を自分の言葉で白ハッピに書いていただいた。（ex.お母さんいつもありがとうございます。ご飯いつもおいしいよ。）夜の部が外で行われていれば、グランドに設置したステージ上でハッピに書いていただいた内容を祭りに参加していただいた方に伝え、インターン生もステージ上で自分の「ありがとう+1」を伝える予定であった。祭り当日は悪天候であったため校舎内で実施したので、地域の方に「ありがとう+1」を書いていただくまで終了した。



図1：「+1プロジェクト」で使用したハッピ



図2：「ありがとう+1」の記入の様子

● 影絵

概要

余呉町には菅原道真の出生について語られている「余呉の羽衣伝説」の舞台である。インターン生が少しアレンジを加えた影絵の物語にすることで子どもに「余呉の羽衣伝説」を知り、余呉町の魅力を感じてもらう。

詳細

対象を子どもとしていたため、子どもが最も集まる昼の部の最後に行った。しかし、祭り当日が雨天であり、昼の部が地域の方にもあまり認識されていなかつたため、祭りに来ていただいた方が少なく、影絵は当日ボランティアの方に見ていただいた。

影絵の台本は実習開始前に政辺が原案を考え、実習期間中にインターン生が内容の改良を行った。人形や舞台の製作には子どもにも協力してもらいながら、作業を行った。初めの頃はインターン生が誘うことで作業に参加してもらったが、準備期間後半になると、子ども

が自主的に作業に参加するようになった。影絵の配役は子ども達が一晩かけて、自分達で決めた。



図 3：影絵上演時のスクリーンの裏側



図 4：影絵の上映

● ペットボトル灯籠

概要

祭りに参加していただいた方に昼の部で絵付けを楽しんでいただく。「光」は第 1 回（3 年前実施）の夏祭りのテーマでもあり、本祭りでの「時間のつながり」を象徴するものである。

詳細

祭り準備期間中にここからの子どもと協力しながら、ペットボトルを使った灯籠を作り、トレッシングペーパーに絵を描き、それをペットボトル灯籠に巻き付け夜の部にグランドに設置する予定であったが、悪天候によりグラウンドが使用できなかつたので、カフェの部屋での披露となった。「廊下などにも設置してみてはどうか」といった意見もあったが、安全面の問題からカフェの部屋のみになつた。ペットボトル灯籠は 300 個製作したが、カフェの部屋のみの使用のため、実際の使用したペットボトル灯籠の数は 25 個程度であった。

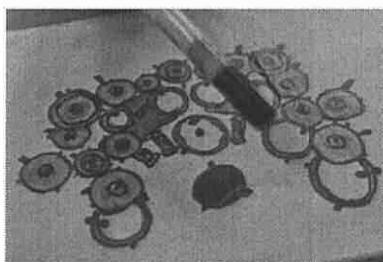


図 5：灯籠の絵付け



図 6：ペットボトル灯籠

● 射的・紙飛行機飛ばし

詳細

子ども・地域のお年寄りの方を対象とした昼の部で、どの方にも楽しんでいただけるレク

レーションを実施した。祭りが校舎内で行われたため、十分な場所が無かったため、祭り当日は射的を行い、紙飛行機飛ばしは中止になった。

紙飛行機飛ばしはここからの子どもの意見が原案となっている。



図 7：紙飛行機飛ばし



図 8：射的

● 看板製作・会場の設営

詳細

看板は祭り当日に使用するレクレーションの場所、屋台のメニューなどを示すために使用した。ここからの子どもが初めて全員参加してくれた作業であり、全員が手伝ったこともあり、個性豊かな看板ができた。

会場の設営では、多くの方の協力により行うことができた。電気配線で使ったドラムや延長コード、テントなどは、地域の方が下さった物や貸していただいた物を使用した。また、祭り当日屋台で使用したかき氷機や綿菓子機、ポップコーンマシーンは余呉町近隣の木之本町や西浅井町の社協でレンタルすることができた。また、祭り当日の雨により使用できなかったが、グラウンドで祭りを行った場合に、地域の方の飲食のためのスペースが必要であったため、余呉町役場に行き机と椅子のレンタルも行った。

会場の設営では、過去の夏祭りの反省を活かして事前に雨天時に備えて校舎内で夏祭りを行った場合の校舎の使い方を決め、祭り当日にブレーカが落ちないように「配線マップ」を作成した。（グラウンドで行った場合の配線マップも作成した。）



図 9：屋台の看板



図 10：会場の設営

3、BBQ サイト製作

BBQ サイト製作の日程

9月3日	BBQサイトのデザイン決め
4日	ウッディパル余呉へBBQサイトの見学に行く、ホームセンターにて材料の見積もり、整地作業の開始
5日	材料の購入、整地作業、レンガの加工、コンクリートを流し土台作成
6日	テーブルの基礎となる部分の作成、セメントの追加購入
7日	テーブルになるレンガ積み
10日	不十分な箇所へのモルタル塗り
11日	テーブル磨き
13日	みんなでBBQ

はじめに

第二のプロジェクトとして BBQ サイトの製作を行った。ここで言う BBQ サイトとは、BBQ コンロとテーブルが一体になったものである。製作にあたり “ここから” から提示された主な要望は二つあった。一つ目は、「ここからと地域の人々との交流の場にすること」、二つ目は、「BBQ 以外の活動でも利用できるようにすること」だった。BBQ サイト製作はこの二つを念頭に置きながら進めていった。

製作過程

BBQ サイト製作はまず、デザインの作成から始めた。デザインの作成にあたり、地域の方に案をいただき、その案を元にここからの子どもと一緒にデザインの作成をした。また、ここからの近所にある BBQ サイトを実際に見学し、参考にした。様々なことを考慮し、形は U 字型にした。デザイン決定後、見積もりをし、製作許可が出たため材料を購入し、作業を開始した。

作業においても、インターン生は全く BBQ サイト製作に必要な知識が無かったため、地域の方に協力していただいたり、時には子どもの力を借りながら進めた。作業は BBQ サイトの基礎になる土台作りから始めた。土台となる場所を深さ 5cm ほど掘り、掘った箇所を整地した。そこにテーブルの土台となるブロックを支える鉄筋を、整地した場所の外側に沿うように U 字型に差し込み、コンクリートを流し込んだ。そしてコンクリートが生乾きの内にブロックの穴に鉄筋が刺さるようにブロックを置いた。そのとき水平になるよう水準器を用いながら置いていった。ブロックを置く時、ブロックとブロックの間に接着剤であるモルタルを塗り固めた。全てのブロックを固めたあと、U 字型のテーブルの土台の間に、コンロとなる U 字溝を設置した。まず、加工していない U 字溝を底が上に向くように置き、次にその上に空気の通る穴を開けた U 字溝を底が下になるように置いた。その後、レンガをテーブルの土台の上に置いた。これもブロックとレンガの間はモルタルで固めた。最後に

テーブルであるレンガを磨き BBQ サイトは完成した。

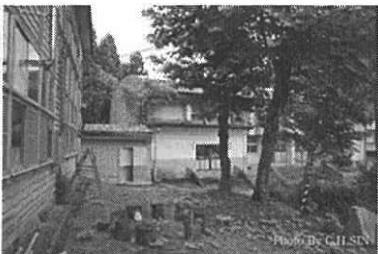


図 11 : BBQ サイト製作前



図 12 : BBQ サイト完成後

反省

BBQ サイト製作における良かった点は、祭りで得たものを活かさせていた点である。BBQ サイトの製作は、小さな変更点はあったものの、特に予定が狂うこともなく、作業を順調に進めることができた。その主な要因は、BBQ サイト製作が夏祭りのあとに行われたということが考えられる。祭りにおける課題を意識できていたことや何よりも祭りの企画・運営を通して、インターン生とここからの子どもや地域の人々との間に良好な関係が構築できていたことが大きな要因だろう。だからこそ、たくさんの方が力を貸してくださったのだろう。

プロジェクトそのものは成功したが、課題もある。それは、子どもとの関わりが少し減ったことである。原因は、力仕事が中心であり、また日程に余裕が無かったこともあり、インターン生は子どもと関わる暇も無く、作業に没頭してしまったことだと考えられる。しかし、力仕事が終わった作業後半において、子どもたちが自主的に協力してくれた。子どもとの交流が減ったことは課題であると同時に、彼らとの関係が構築できていたことの再認識にもつながった。

4. 活動成果

夏祭りの企画・運営：みんなで作り上げる祭り

第一のプロジェクトである夏祭りの企画・運営は、ここからの先生や子ども、インターンシップ生、そしてボランティアや余呂の人々、みんなの頑張りにより、テーマのひとつである「つながり」を感じられる祭りになり、成功に終わった。去年までは、ここからとインターンシップ生だけで祭りを企画・運営し、地域の人々はそれを楽しむという形だった。しかし、それはここからの目指している形とは少し違ったものだった。ここからの究極的な目標は地域全体で作り上げる祭りにすることである。その第一歩として継続可能な祭りにすることが今年の目標だった。その目標を達成するにはここからとインターン生だけでは難しかため、余呂の人々の力が欠かせない。つまり、地域の人々の協力により達成される継続可

能な祭りは、そのまま地域全体で作り上げる祭りにつながるのである。そのために、今年は、地域の人々にも祭りの運営に携わっていただいた。祭りをただ楽しむ存在から一緒に作り上げていく存在へと変化することで、自分たちの祭りであるという感覚が生まれたのではないだろうか。その感覚が生じることで究極的な目標に近づくだろう。もちろん、去年までも様々な形で手伝っていただいていたが、祭りの運営の中に入って協力していただいたのは今年が初めてだった。地域の人々にとって、自分たちで作り上げたという感覚は、祭りの成功による達成感を去年よりも上回るものにしたのではないだろうか。

BBQ サイト製作：触れ合いの場

13日に完成したBBQサイトで、夏祭りの時にお世話になった地域の方々とBBQをした。みんなで食べて飲んで話し合い笑い合ったりし、楽しむことができた。そのため、BBQサイト製作における目的のひとつである、「ここからと地域の人々との交流の場にする」は達成できただろう。もうひとつの目的である「BBQ以外の活動でも利用できるようにすること」はどうだったか。BBQで使わない時は上部に板を置くことで大きな机として使うことができる。実習後、カフェのランチタイムにおいて、屋外での食事に活用されているというお話を先生から伺った。このことからこれから様々な活動に用いることが可能であると予想される。よって二つ目の目的も達成できたと思われる。ここからの先生方や地域の方にも立派なものができたと言っていただけたため、本プロジェクトは成功したと言って良いだろう。



図 13：祭り当日の地域の方との交流



図 14：BBQ サイト完成のお披露目パーティ

5、課題・学び

全体を通しての主な課題は三つある。一つ目は情報共有の不足、二つ目は積極性の欠如、三つ目は子どもとの関わりである。

一つ目の情報共有の不足は、特に夏祭りの企画・運営において大きな問題だった。インターン生それぞれの経験した子どもとのやり取りや準備の進捗状況など、多くの事柄に関して十分に話し合えていなかった。祭り当日にあるトラブルが起こった。それは地域の方々の協力により乗り越えることができたが、十分に話し合えていればよりスムーズに対処できていたように思われる。また、ある事柄について特定の人しか知らないために、わざわざその

ことについて知っている人を探さねばならず、作業時間が削られるということもあった。他には、子どもとのやり取りに関する共有ができていれば、インターン生が抱く子どもへの想いも違ったものになっていたかもしれない（もちろん子どもとのやり取りに関する全ての情報共有がなされるべきではなく、秘匿されるべきものはあるだろう）。このように、情報共有不足による弊害を考えると、情報共有は非常に重要であり、より良い仕事をする上で欠かすことはできないだろう。

二つ目の積極性の欠如は、特定の個人への仕事の偏りの原因となった。インターン生の3人はリーダーに頼りがちであったために、リーダー一人に負担が集中してしまった。原因是、それぞれが自ら考え自主的に動けなかつたことや自分の仕事に集中しすぎたこと、またリーダー自身が他者を頼れなかつたということもあった。そのために、リーダーは一人で悩むこと也有った。これは情報共有が不十分であったことにもつながる。十分に話し合えていなかつたために、一人に負担がかかっている状況をそのときに改善できなかつたのである。

三つ目の子どもとの関わりは、彼らへの配慮不足が大きな課題である。子どもの中には自分の気持ちや考えをうまく言葉にできない、あるいは言わない子どももいる。実際に無理をして手伝ってくれる子どももいた。しかし、言葉としては現れないものの、表情や態度などから子どもの感情を汲み取ることはできる。実際に先生方はしておられたと思う。特に援助を必要としている子どもと関わる場合、そのような言葉にならない言葉を汲み取ることは非常に大切である。実際にインターン生はこのことができず、子どもに無理をさせてしまうことがあった。

これら三つのうち情報共有の不足と積極性の欠如の二つは、BBQサイト製作の時にそれが意識していたため多少の改善はできたが、三つ目の子どもへの配慮については今後の課題である。

最後に、今回の実習を通して、つながりの大切さを強く感じた。間違いなくインターン生だけでは両プロジェクトを成功させることはできなかつた。ここからの先生や子ども、ボランティアや地域の方々など、みんなの力があつてこそその成功である。また、この成功はこれまでのインターンシップ生やここからの先生や生徒、地域の方々などがつないできた努力によるものであるということを忘れてはいけない。私たちインターンシップ生は関わった方々皆に感謝しなければならない。これから、今回構築することができたつながりだけでなく、既存のつながりに関しても大切にしていきたいと思う。

謝辞

本レポートの作成にあたり、コーディネーターの京都精華大学申昌浩先生、ここからの指導員の先生方に写真の提供をしていただきました。感謝致します。